

# ■ 使用説明書

## 目次(contents)

- Chapter 1:** 「英語S.S card」は、どのようにして発案され、誰に対して、何を提示しているのか。
- Chapter 2:** デジタル商品ではなく、なぜカードなのか。
- Chapter 3:** 使用法1
- (1) カード見本(高校生以上・一般社会人向け)
  - (2) chunk の発見の仕方
    - (a) 「動詞＋名詞」のcollocation
    - (b) 「形容詞＋名詞」のcollocation
    - (c) collocation 以外
- Chapter 4:** 使用法2
- (1) 「英語S.S card」の用例主義
  - (2) 中学生版「英語S.S card」見本

# ■ 使用説明書

copyright © 2004 by MIRAIJUKU / TORU SUGISAKI

## ■ Chapter 1 「英語S.S card」は、どのようにして発案され、誰に対して、何を提示しているのか。

「英語S.S card」は、安易で手軽な英語学習法を求めている人には向いていません。言葉を学習する上で求められるのは、少なくとも数年あるいは一生にわたる持続的な努力と忍耐であって、「安易さ」と「手軽さ」ではありません。世間では「聞き流すだけで・・・」とか「世界で一番簡単な・・・」「右脳でペラペラ・・・」などというタイトルの本が次々に出版されていますが、タイトルのいかがわしさ、内容のいかげんさという点で、他に類を見ません。「英語S.S card」は、こういった宣伝文句につけこまれないだけの知性を持った若い学習者と、何とかして英語の運用力と語彙力をつけたいと日々試行錯誤している人に、もっともシンプル(Simple)で持続可能(Sustainable)な方法を提示するものです。シンプルだということは、中学生でも、英語のプロとよばれる人たちと同じように使えるということです。最先端の数学や物理学における思考を中学生が理解することは不可能でしょう。しかし、語学の分野であれば、中学生、プロを問わず、語彙力をつけるための方法には共通性があるはずです。「英語という言葉の本質的な構造に沿った、運用力および語彙力増強のための究極の方法は何か？」という問いに対する答えが、この「英語S.S card」です。カードを一枚作るたびに英語の構造が明確になり、分類することで記憶しやすくなり、必要に応じてさまざまな表現を生み出すことのできる核(core)が形成されます。コミュニケーションは、単語→chunk(語のカタマリ)→文という形で複雑になっていきますが、いきなり完成した文を発話の瞬間に思い浮かべることは不可能です。大学入試の長文読解問題を解く時も、新聞・雑誌を読む時も、一つの文が長くなれば、意味の最小単位であるchunkを見極め、左から右へと読まざるを得ません。このchunkこそが、文法発祥の地なのです。会話、長文読解、英作文のすべてにおいて、短時間で正確なchunkを作り出せるトレーニングをカードの作成という形で行い、持続可能な方法論にまで高めたのが「英語S.S card」です。しっかりした方法論があつてこそ、学習を継続する意欲も生まれてきます。英語の学習を途中であきらめた人も、ぜひ再チャレンジして下さい。

ところで、「英語S.S card」は、20年以上にわたって、小学生から社会人まであらゆるレベルの生徒を教えてきた、英語教師としての私の経験から生み出されたものです。英語の学習を挫折させる最大の難所は語彙の習得です。語彙の習得こそが英語学習のAでありZなのです。同時通訳者のK・N氏は、弱点のリスニングを克服する過程で、「知っている単語は聞き取れるが、知らない単語は聞き取れない」というあまりに単純な真理に気がつき、2年間、ひたすらカードを作って、あらゆるジャンルの語彙を猛烈な勢いで記憶していったそうです。しかし、大部分の人は語彙の習得という厚い壁を前にして、あきらめて引返すのです。英語を教える側も、なんら有効な方法を示すことができず、学習者の個人的努力に期待するしかありませんでした。その結果、習得しなければならない語彙のハードルは極端に下げられ、「中学レベルの単語力があれば日常生活では困らない」とか「英会話は中学レベルの語彙で十分」などという妄言がまことしやかに流布されるようになったのです。現在、日本の中学で習う単

語数は約900～1,000単語です。その1,000単語も、「have＝持っている」「take＝取る」といった実用とは程遠い習い方をしているのが現状です。一方、英米人の場合、平均すると小学校6年生で12,000語、高校3年生で18,000語を習得しています。さらに、英米の教養人の語彙数は平均すると約25,000語だといわれています。1,000語対25,000語。この語彙のハンディを前にして、中身のある会話が期待できるでしょうか。せいぜい挨拶か片言で買い物ができるくらいでしょう。語彙の運用能力こそが教養の幅であり、語彙数こそが教養の深さを示すインデックスなのです。1,000語足らずの語彙力で会話ができるとか、心がこもってさえいけばコミュニケーションは可能だといった考えが受け入れられる社会は、相当に薄っぺらで、知の蓄積のない社会でしょう。私はこれから英語を学習する人、特に若い人たちに、少なくとも10,000語を習得するための方法を提示したいのです。私の経験では、英語の新聞が何とか読めるようになったのは、語彙が10,000語を超えたあたりからです。大学受験に合格するための語彙数を約2,000語に絞ってやっとの思いで記憶し、試験が終われば忘れてしまう賽の河原方式の勉強方法はいい加減にやめるべきです。習得すべき語彙の目標を10,000語に置けば、丸暗記では通用しなくなり、理にかなった語彙の習得方法を考えざるを得なくなります。目標を低いレベルに設定したため、教える側も学ぶ側も、具体的で実効性のある方法を考えずに済んできたというのが実情ではないでしょうか。英語の達人と呼ばれた国弘正雄氏や名著『和文英訳の修業』の著者佐々木高政氏は数十万枚のカードを作っていたそうです。「英語S.S card」は、英語の達人と呼ばれた人たちが独自の的方法論として自家薬籠中のものにしてきたカード方式の有効性に着目し、英語学習者のためのユニヴァーサルなツールとして世に問うものです。以下、カードという形にこだわった理由と、具体的な使用法を説明します。

## ■ Chapter 2 デジタル商品ではなく、なぜカードか？

- (1) 書き込みがあちこちにあり、差し替えられたり補充されたりした、今日までの英語学習の歴史が一目でわかる数千枚のカードをあなたは持っていますか？高校受験や大学受験の時にも手元にあり、補充と改訂を繰り返し、社会人になっても使い続けている。しかも、いざというときには数日で英語力をピークに持っていける。そういった自分だけの知的な「武器」をもっているでしょうか。「英語S.S card」は、デザインと機能性を兼ね備えた、いわば、腕のいい職人によって作られたハンドメイドの革靴のようなものです。最初は多少硬くて窮屈でも、手入れを怠らず、使い込めば使い込むほど足に馴染んできて、身体の一部になり、愛着が出て手離せなくなる。パソコンや電子辞書は、わからない単語を検索するのに便利ですが、記憶に定着させるのには不向きです。なぜなら、言葉は状況や文脈に依存した情緒的・身体的なものだからです。パソコンの画面を見てマウスをクリックするだけでは英語力はつきません。その点では、むしろピアノの練習や一定レベル以上の動きを必要とするスポーツに近いのです。身体で覚えるまで繰り返さなければものになりません。この過程を他人に代わってやってもらうことはできないのです。最近の調査によると、高校生の学力が極端に低下していると感じている教師が8割に上るとの結果も出ています。情報を簡単に手に入れるだけで、それを使いこなせる能力がついたと

錯覚しているのです。自分の手を使ってカードに書き、分類し訂正しながら、ひたすら音読する。頭の中の労働を、身体の労働に置き換えることなしに、英語が上達することはありません。毎日の歩行を支える靴のように、「英語S.S card」は英語の学習という日々の「歩行」を支えるものです。

- (2) 市販されている英語の参考書や単語集は、大学受験やTOEICといった目的別に編集されています。しかし、大学受験、TOEIC、英検は、英語の試験である以上、文法はいうまでもなく語彙においても大部分が重複しています。にもかかわらず、学習者はそれぞれ別のテキスト、単語集を買わざるを得ないとすれば、非効率、不経済極まりない話です。その結果、どれも未消化のまま放置されている可能性が高いと思われます。テキストであれ単語集であれ、それがどんなに優れたものであっても所詮他人の書いたものです。それを自分のものにするには、学習者自身の興味、関心、目的に応じて変形を加えなければなりません。現在、最も大切で必要なことは、種々雑多の既成のテキストを買い揃えることなく(コンテンツにはそれほど差はありません)、知識を本当に自分のものにするためのツールを持つことです。要するに、運用可能な知識を取り込む回路を、カードによって一本化するということです。学習者が習得する価値があると判断した英語表現は、必ず「英語S.S card」に抜書きすることで、この回路の一本化が実現できます。逆に回路が一本化できていれば、安心して学習範囲を広げることができるのです。
- (3) 一見アナログに見えるカードは、実はどんなデジタル機器よりも便利です。通勤・通学の途中や教室、オフィスで、いつでもどこでも使えます。しかも、使う人の能力や必要性に応じて無限のバリエーションが可能です。高校生、大学受験生や、TOEIC受験を義務付けられているビジネスマン、あるいは専門的な分野の語彙を習得する必要に迫られている研究者や実務家にも役に立つ道具は、絶えず補充・差し替え・分類・書き込みができるカード方式しかありません。
- (4) カード方式の最大の利点は、日々の学習が目に見える形で蓄積されていくことです。とりあえず2,000枚を目標にして下さい。超難関といわれている大学でも、TOEIC受験でも、2,000枚～2,500枚で語彙力に関する不安はなくなります。(ちなみに、「英語S.S card」は、2,000枚で¥12,500円です。英会話学校や通信講座、C.Dや受験参考書にかけた費用はばかにならないはずですが。対費用効果を考えることも大切ではないでしょうか。)このレベルまでカードを作った人は、指定されたものを覚えるだけの他律的な学習が、いかに非効率であったかに気づくはずですが、正確なカードを一枚一枚残していく楽しさがわかってくれば、カードなしの英語の学習など考えられなくなります。そうやって蓄積されたカードは、あなた自身の努力の跡を物語る思い出の品となるのです。
- (5) あなたが英語の教師であれば、自ら作った数千枚あるいは数万枚のカードを生徒に見せてあげて下さい。「百聞は一見にしかず」です。英語の教師が第一にしなければならないのは、どんな道具を、どう使いこなして語彙の壁を突破したかという自らの経験を具体的に生徒に語ることです。さもなければ、生徒は「自分は記憶力が劣っているから英語の習得は無理だ」と考えて、勉強をや





■「英語S.S card」は、単語カードではありません。カードの表にbread と書き、裏にパンと書いたカードを何枚作っても英語を実際に使いこなすことはできません。現実にはbread は、次のような単語とセットになって使われるからです。

some bread (パン)

a slice of bread (パン一枚)

a piece of bread (パン一切れ)

a loaf of bread (パン一斤)

two loaves of bread (パン二斤)

a crispy loaf of bread (パリパリしたパン一斤)

breadという名詞を使いこなすためには、最低でもこれだけの表現を押さえておかなければなりません。この点をまずしっかりと頭に入れた上で、上のカードに、テキスト、新聞、雑誌、大学入試やTOEICの過去問、映画のシナリオ、市販の単語集などから、**実際に使われているカタマリ(chunk)を抜書きします**。裏面には日本語訳を書き込みます。その際、以下の分類方法を必ず守ってください。記憶すべき対象を一定のルールに基づいて分類もせず、ただ抜書きしていただくだけでは長続きしませんし、英語力もつきません。抜書きしたら、左端の分類のどの型に当てはまるかを考えて、**チェック**を入れていきます。**この作業こそが、いわゆる単語カードではない、「英語S.S card」の本質的な特徴です**。繰り返しますが、単純に記憶するのではなく、分類を経た後に記憶するのです。以下、chunkの見つけ方と分類の仕方を説明します。

## (2)★ Chunkの発見の仕方

**chunkには大きく分けて以下の3つがあります。**

(a)「動詞＋名詞型」のcollocation

(b)「形容詞＋名詞型」のcollocation

(c)それ以外(名詞＋その説明型など)

ここで言うコロケーションとは、あくまで語彙の習得に有効な観点から見た語と語のつながりのことを指します。

### (a) 「動詞＋名詞型」のcollocationから説明します。

この「動詞＋名詞(目的語)」のコロケーションには、以下の3つのタイプをすべて含みます。

(a) discuss the issue frankly (その問題を率直に議論する)

(b) work for a computer company (コンピュータ会社に勤める)

(c) come up with a good idea (いい考えを思いつく)

(a) は他動詞 (b)は自動詞と呼ばれています。日本語の影響で間違えやすい動詞もありますが(例えば、「～について議論する」を、discuss about としてしまう)、動詞のほとんどはどちらにでも使われますから、この動詞は他動詞、この動詞は自動詞などと覚える必要はありません。実際の英語をよく観察して、カードに抜書きすればいいのです。

(c) は、**句動詞**と呼ばれますが、全体で動詞と考えます。これはBASICな動詞＋副詞・前置詞で、英語の表現を無限に豊かにしているものです。BASICな動詞と副詞の基本的な意味を確認しながら、そのつどカード化していきましょう。

要するに、文法的な分類にこだわるのではなく、あくまで使える英語語彙の習得を目的としていることを忘れないことです。カード化するための具体例を少し挙げてみます。

undertake a mission (任務を引き受ける)  
flatter your boss (上司にゴマをする)  
betray your friend (友を裏切る)  
commit suicide (自殺する)  
pay a fine (罰金を払う)  
cope with a difficulty (困難を切り抜ける)  
contribute to the victory (勝利に貢献する)  
adjust to life overseas (海外の生活に適應する)  
cling to power (権力にしがみつく)  
fall into a trap (ワナにはまる)  
put up with his rude manner (無作法をがまんする)  
make up for lost time (遅れを取り戻す)  
do away with uniforms (制服を廃止する)  
get away with doing little work (働かないことをとがめられない) など。

さらに、以下の表現もこの「動詞＋名詞」の仲間に入れます。

know [ who he is ]  
know [ where the hospital is ]  
understand [ what he really wants to say ]  
recognize [ how important his job is ]  
(彼の仕事の重要性を認識している)  
do [ what I think is right ]  
(自分が正しいと思うことをする)  
discuss [ how this problem should be handled ]  
(この問題の処理の仕方を議論する)

いわゆる「**動詞＋名詞節**」です。「英語S.S card」には1つの単語だけを書き込まず、**かならずカタマリ(chunk)で書き込む**ということです。多少カタマリが長くなっても、**反復音読するためのリズムを作り、記憶に定着させるために必要だから**です。

さらに、

want to talk to you  
decide to tell the truth  
continue to snow heavily  
manage to get there on time

(can't) afford to take that risk  
refuse to be photographed  
continue working until midnight  
enjoy watching TV  
finish reading the book  
avoid putting too much weight (太りすぎを避ける)

などのように、**動詞の後に不定詞や～ing形が来ている場合**や、

allow me to buy a computer  
enable us to buy a lot of things  
blame him for stealing the money  
accuse him of lying to her  
advise him to give up smoking  
ask him to go there  
order him to finish the task  
persuade him to go to school  
request him not to smoke here  
compel him to resign  
encourage him to write a novel

なども、このグループに入れることができます。allow me や enable us という「動詞＋名詞」だけでは肝心の情報が伝わらないので、その後のアンダーラインを引いた部分もカードに書き込みます。「動詞＋名詞」の「名詞」の部分が、情報伝達の観点から伸びると考えます。

次に

### **(b) 「形容詞＋名詞型」のcollocationを説明します。**

これは英文中の「形容詞＋名詞」のカタマリをピックアップしてカードに抜き書きします。4つのパターンがあります。

例えば、

- (1) tough decisions (難しい決断)  
a specific question (具体的な質問)  
a common language (共通言語)  
serious problems (深刻な問題)  
positive thinking (前向きな考え)  
a reasonable explanation (理にかなった説明)

などを始めとして、



(2) [ 動詞の～ing形 ]が形容詞になっている場合、

depressing news (がっかりする知らせ)  
confusing expressions (紛らわしい表現)  
an amazing fact (驚くべき事実)  
a boring job (つまらない仕事)  
disgusting smell (胸が悪くなるような臭い)  
a leading athlete (一流スポーツ選手)  
a surprising remark (びっくりするような意見)  
a disappointing result (期待外れの結果)  
demanding work (大変な仕事)  
a promising technology (有望な技術)  
a winding road (曲がりくねった道路)

(3) [ 動詞の過去分詞 ]が形容詞になっている場合、

boiled egg (ゆで卵)  
fried egg (目玉焼き)  
a haunted house (お化け屋敷)  
a frozen river (凍っている川)  
a pleased look (満足した表情)  
a frightened look (おびえた表情)  
broken English (片言の英語)  
a broken leg (骨折した足)  
a heated discussion (白熱した議論)  
a complicated problem (こみいった問題)  
unsettled weather (不安定な天候)  
an advanced technology (高度な技術)  
a civilized society (文明社会)

(4) [ 名詞＋名詞 ]で、前の名詞が形容詞の働きをするもの、

peace negotiation (和平交渉)  
information industry (情報産業)  
energy crisis (エネルギー危機)  
generation gap (世代の断絶)  
reference book (参考書)  
heart transplant (心臓移植)  
death penalty (死刑)  
bank robbery (銀行強盗)  
science fiction (空想科学小説)  
space weapon (宇宙兵器) など。

次に

(c) それ以外(名詞+その説明型など)について説明します。

これは、□「名詞+その説明型」です。

いわゆる、名詞の後置修飾のことですが、修飾という言葉を使うと、どうしても英語を後ろから前の名詞にかけて読むようになってしまいます。実はこの発想こそが英語の読解を誤らせ、リスニングを困難にしている最大の壁です。「**その説明**」という言葉を使ったのは、後ろから前の名詞にかけて読む(修飾構造として読む)のではなく、ある名詞を他の名詞と区別し限定するためのカタマリが後に続くのだと理解してほしいからです。より正確には、名詞の前の無冠詞、不定冠詞、定冠詞を説明するといった方がいいのですが、ここでは触れる余裕がありません。

□「名詞+その説明型」には、6つのパターンがあります。

(1) the book on the table 型 (名詞を前置詞句で説明する)

以下例を挙げてみます。

the cowboy from Texas

the train from Waterloo

data from the Internet

fish with tomato sauce

the price with tax

a man with gray eyes

the struggle against racism (人種差別との闘い)

discrimination against Asians (アジア人に対する差別)

the man in the gray suit

a bus stop opposite our house

(2) something to drink 型 (名詞を不定詞で説明する)

something to write (手紙、レポートなど)

something to write with (筆記用具)

something to write about (テーマなど)

a book to copy

a desire to learn

a son to help me on the farm (農業を手伝ってくれる息子)

a son to worry about (心配の種になっている息子)

a man to get in touch with (連絡する相手)

a friend to play with

his effort to master English

(3) a girl dancing on the stage 型 (名詞を～ingで説明する)

a dog barking at a mailman

a doctor examining his patient  
a student studying till late at night  
a girl leaning against the wall  
an outfielder chasing the ball  
the woman talking to Sam  
police investigating the crime  
those people waiting outside  
the road connecting the two villages  
a room overlooking the garden  
a man sitting next to me

(4) the letter written by Soseki 型 (名詞を過去分詞で説明する)

the boy injured in the accident  
pictures painted by his father  
the money stolen in the robbery  
the goods made in this factory  
the gate damaged in the storm  
the suggestions made at the meeting  
the man arrested by the police  
Napoleon beaten in the Battle of Waterloo  
the girl buried alive by the landslide

(5) the house which Jack built 型 (名詞を関係詞で説明する)

the woman who lives next door  
the person who came to see you this morning  
anyone who wants to apply for the job  
a man who will never get on in the world  
the cheese which/that was in the fridge  
stories which/that have unhappy endings  
a company which/that makes furniture  
rules which/that we take for granted  
the town where I was born  
the day when I first met him

以下、関係詞の省略された「名詞+その説明型」のchunkを挙げます。

the books you are looking for  
the woman I wanted to see  
the dress Lucy bought  
the keys you lost

the woman he fell in love with  
the man I was sitting next to on the plane  
the reason I'm phoning you  
the way he talks  
the cheerful girl she used to be (かつてのような陽気な女の子)  
all scientists can do (科学者のできるすべて=科学者の力の限界)

など、文脈の中で注意深く「名詞+その説明型」のカタマリをピックアップします。

**(6) 「同格」とよばれるカタマリで名詞を限定・説明する。**

a rumor that he will go to France  
the thought that women should stay in the home  
(女性は家庭にとどまるべきだという考え)  
the fact that we are all human beings  
the question whether computers can think like us  
(コンピュータが私たちがのように考えることができるかどうかという問題)

□ 「be + α ・ その他」は以上の分類に当てはまらないが、どうしても覚えておきたいカタマリや文を書きます。

例えば、

be supposed to wear a seat belt (シートベルトを締めることになっている)  
be familiar with ordinary spoken English (普通の口語の英語に慣れる)  
be likely to win (勝つ可能性が高い)  
be willing to help Mother (喜んで母を手伝う)  
be ashamed of his silly conduct (馬鹿な行為を恥ずかしいと思う)  
be apt to lose his temper (かっとなりやすい)  
be anxious to do the job (その仕事を是が非でもやりたいと思う)  
be concerned about his mother's health (母親の健康を心配する)  
be reluctant to do his homework (いやいや宿題をする)  
be responsible for the accident (その事故に対して責任がある)  
be jealous of his status (彼の地位をねたんでいる)  
be on good terms with him (彼と仲がいい)

あるいは、その時々あなた自身の興味・関心を引きつけた文。

例えば、

In politics if you want anything said, ask a man. If you want anything done, ask a woman. (政治の世界では、言ってほしいことなら男性に、実行してほしいことなら女性に頼むことです) 『サッチャー回顧録』より。

Everyone who is born holds dual citizenship, in the kingdom of the well and in the

kingdom of the sick. (生まれてきたものは皆、二重国籍を持つ。健康の国と、病気の国との) :スーザン・ソクタグ

The great nations have always acted like gangsters, and the small nations like prostitutes. (大国は常にギャングのように、小国は売春婦のように、振舞ってきた)

:スタンリー・キューブリック

といった文を書き留めておくのも面白いかもしれません。

#### □ 「TOEIC/センター過去問」は、間違った過去問を抜書きします。

もちろん文法問題だけでなく、整序問題や設問の定型的な言い回し、長文読解問題の中のコロケーション、「名詞+その説明型」をピックアップします。カードに抜書きした箇所が、パラフレーズされて設問になっていることが実に多いのです。普段の学習では、使える英語表現かどうかをじっくり見極めながら、手間を惜しまず一枚一枚カード化して正確な知識を蓄積していきます。そして、大学入試やTOEICの直前に、カードを一気に見直すことがどれほど有効であるか！是非実行してみてください。

□ **発音記号**は、抜書きしたカタマリ(chunk)の中の、発音が難しい単語の下にアンダーラインを引いて、その単語の発音記号を書き込みます。この際注意してほしいのは、発音のみならずアクセントの位置です。赤のボールペンなどでしっかりと印をつけてください。

□ **出典**は抜書きしたテキストのページなど、英文の出典を確認する手段として、あるいは青春の日の思い出になるように利用してください。[彼女に質問されて答えられなかった問題]というのもいいですね。

### ■ Chapter 4 使用法 その2

#### (1) 「英語S.S card」の用例主義

使用法その1で作ったカードが50枚ほど溜まったら、**同じ箇所にチェックが入っているカードだけを取り出して、東にして集中的に音読します**。分類という作業を経ているので記憶しやすいのです。さらに、多少カタマリ(chunk)の長さが違って、同じ構造をしているので、同じリズムで読むことができます。読むスピードも速くなってきます。**この2段階目の分類は必ず実行してください**。私は言葉を学ぶための道具は、シンプルでなければ意味が無いと常々考えています。ところが、市販されている英語学習書の多くは文法用語を使って分類のための分類に終始しており、いたずらに学習者を混乱させています。「英語S.S card」による分類は、同じ型の用例を集めることで、文法用語は知っているが具体的な例文が思い浮かばないという学習者のいらだちを解消することを目標にしています。週末などにちょっとした時間を見つけてカード＝用例を分類するのは楽しい作業です。応用的な表現を思いついたり、新しい発見があったりして、英語学習を継続するエネルギー補給の役目を果たします。「使役動詞＋目的語＋原形不定詞」などという、ほとんど無意味なメタ言語を暗記してはなりません。実際に使われている生きた表現をじっくり観察し学ぶのです。



